

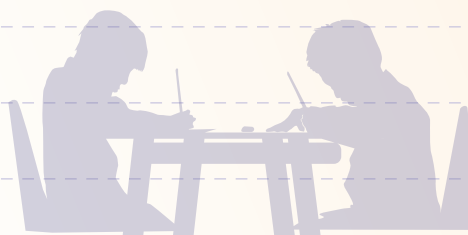


特集

「統一合判」
中学入試レポート vol. 4

私立中高一貫校の進学& キャリア教育が、どのような 成果につながっているか？

現6年生が挑む来春2016年入試に向けて、各私学の説明会ラッシュとなった10~11月も過ぎ、すでに12月を迎えた。5年生の受験生の皆さんも、6年生の先輩たちに負けない真剣さで受験勉強に励んでいることだろう。この小5「統一合判」も今回で4回目。今回のテスト結果をうまく生かして、これからのステップアップに結びつけてほしい。保護者の皆さんにも、そうした視点で成績表や答案の見直しをお願いしたいと思う。今回は、再来年2017年入試でのお子さんの学校選びのために、私立中高一貫校の進学教育・キャリア教育が何をめざし、その教育がどのような成果につながっているのかを、ここでご紹介しておきたい。



首都圏模試センター

現在の小学生が生きる将来の社会では、 65%が今は存在しない職業につき、 今ある仕事の47%が消える？

わが子が再来年の春、中学に入学して、中高の6年間を経て大学や大学院を卒業して社会に出るのは、いまから11年後にあたる2027年以降、私たち大人が経験していない近未来の社会はどのようなになっていくのだろうか。

たとえば、アメリカ・ニューヨーク市立大学大学院センターのキャシー・デビッドソン教授は、「2011年にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就く」と予測している。

一方、英国のオックスフォード大学で人工知能などの研究を手がけているマイケル・A・オズボーン氏によると、「今後10～20年程度で、約47%の仕事が自動化される可能性が高い」という。つまり、AI（人工知能）の急速な進化によって、いまの社会に存在する約半数の職業が機械化される可能性が高いということだ。

そして、こうしたAIの進歩による以前から、すでに時代は刻々と変化し、日本にもさらにグローバル化の大きな波が押し寄せようとしている。

現在の小学生が社会に出るときには、いま以上に、世界やアジア諸国のなかでも経済的な競争は激しいものになるといわれている。しかも競争だけでなく、世界各国の人々と意思を合わせ、協



かえつ有明で帰国生向けに行われる、ダッツン先生による「TOK型（哲学）授業」。生徒の発言・意見が引き出され、全員の思考や気づきが広がる。

働・協調、そして共生を図りつつ、グローバルな意識や視点で物事を考え、国家や民族の壁を越えて地球全体に課せられた諸問題を解決していく力が求められる時代となる。

いま、世界のビジネスの第一線で活躍している保護者のなかには、10数年後の新たな社会を担う、わが子の世代に求められる力がどのように変化していくのか、すでに身近なこととして感じている方も多いことだろう。

教育が担うものが、個人の幸せと同時に、社会（民族や国家、世界）の安定（平和と繁栄）だとすれば、経済や政治など、さまざまな意味で「国境がなくなる」今後の社会では、グローバルに物事を考え、論じ、実現・実行することのできる人材が求められる。

そのためには、当たり前英語で話すことができ、国や民族、文化の違いを越え、互いの意思や主張を尊重しながら理解し合える力が必要になる。環境やエネルギー問題など今の世界が抱えるさまざまな問題について、自ら問題意識を持ち、調べ、解決する、クリティカル・シンキングの力も必要になってくる。

そのような社会で、何か大きな仕事を成し遂げるには、必ず仲間のサポートが必要になる。そのためには、豊かな学力や知識・教養に加えて、対

大きな転機を迎えた2016年の中学入試

将来の社会が変わる

大学入試が変わる

日本の教育が変わる

将来の社会で求められる力や大学入試制度が変わり、 私立中高一貫校のキャリア教育も変わる！

～日本の教育が大きく変わる節目に、わが子の将来に求められる力(=21世紀型スキル)とは？～

**2020年からの「大学入試改革」が、
日本の教育・学校・学力・入試観を変える！**

すでに5年後に迫った2020年から、昨今マスコミでも盛んに取り上げられるようになった「大学入試改革」が実施される。現行の「大学入試センター試験」を軸にした大学入試制度とは大きく変わるものになるということは、すでに多くの保護者をご存知のことだろう。

これまでの「大学入試センター試験」に代わって、新たに導入される「高等学校基礎学力テスト(仮称)」と「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」には、それぞれ、「高校段階で身に着けた基礎学力」と「大学に進学するために求められる学力」を測るための役割が課せられる。

そのうち後者では、「思考力・判断力・表現力」を問うために「記述式」の回答方式を中心とした、いわゆる“PISA型(=OECD学力調査テストで出題されるような)”の問題が想定されている。

そしてこれらのテストは、ともにPCやタブレット端末での入力(回答)による「CBT方式」を前提に開発され、AI(人工知能)による採点のシステムが導入されるといわれている。

実際には、導入の初年度にあたる2020年には、まだ現行の『学習指導要領』のもとで学んできた高校生が受験する形になるため、本格的な「新テスト」制度(システム)の完成は、高校では2022年度以降(現在の小学校5年生の大学受験時)ともいわれている。その意味では、このレポートの読者のご家庭のお子さんたちが、まさに最初の当事者ということもできるだろう。



工学院大学附属中では、「PIL」と呼ばれる対話型授業や、「PBL」と呼ばれる問題解決型授業など、21世紀型スキルを育てる授業スタイルを実践する。

どうなる？ 来春2016年の首都圏中学入試

2020年大学入試改革

そこで問われるのは「知識」だけではなく、

思考
力

判断
力

表現
力

英語
力

いずれにしても、そうした日本の教育の大きな変化の節目の時期に中学～高校に進学し、やがて大学入試に挑んでいく現在の小学生と保護者にとっては、これから「中学～高校の6年間でどのような教育を受け、どのような力を身に着けるのか」が、わが子の将来にとって、かつてないほど重要な選択となってきた。

そして、そうした変化にいち早く柔軟に対応し、2020年からの大学入試改革で求められる「思考力・判断力・表現力」や、4技能のバランスのとれた高い英語力を育ててくれて、さらには大学を卒業して社会に出たときに求められる総合的な学力と人間力(たとえば共生・協働・協調できる力とコミュニケーション力)、ICTスキルや課題解決力など、いわゆる「21世紀型スキル」を育ててくれるのは、やはり私立中高一貫校だと考えてよいはずだ。

今後の大学入試と社会で求められる 「21世紀型スキル」とは？

「21世紀型スキル」の解釈は様々であるが、ひとつのモデルは、世界の大手IT企業の主導のもと教育関係者らが立ち上げた国際団体「ATC21s」(The Assessment and Teaching of 21st-Century Skills=21世紀型スキル効果測定プロジェクト)が提唱する概念で、これからのグローバル社会を生き抜くために求められる一般的な能力を指す。

批判的思考力、問題解決能力、コミュニケーション能力、コラボレーション能力、情報リテラシーなど、次代を担う人材が身に付けるべきスキルを規定したもので、各国政府も知識重視の伝統的な教育から21世紀型スキルを養い伸ばす教育への転換に取り組み始めている。

話的なコミュニケーションの力、多文化のもとで共生・協調できる力、人々をまとめリードする力を備え、多くの仲間と力を合わせて（コラボレーション）、双発的・相乗的な力（シナジー）を発揮できるような、幅の広い人間力が必要になる。

国境を越えてコミュニケーションできる手段としての音楽・芸術・スポーツなどの素養も、さらに大切にされる時代になるだろう。

また、そうした活動をするときの行動や考え方のベースには、人々の自由な意思（リベラル）や公正さ（フェアネス）、正義（ジャスティス）、寛容（トレランス）などを大切にする精神性や意思の力、行動規範も欠くことのできない要素となる。

このような人間的な総合力は、簡単に身につけられるものではない。だからこそ、人生で最も多感で吸収力のある中高生の時代に、これらの力の基礎になる学力や人間力を育て、さまざまなことを仲間と一緒に体験できる環境が私立中高一貫校に期待されるのだ。

わが子が「より良く生きる」ための私学の進路&キャリア教育

もともと義務教育の期間であり、卒業して社会に出るまでに最低限必要とされる学力を身につけるための「学習指導要領」が課せられてきた公立中学校とは違い、私立中高一貫校は、卒業後は高等教育（大学・大学院）につながる、学問・研究の基礎づくりのための「進学準備教育」を行う中等教育（中学・高校）機関として発展してきた。

そのため、高校への進学率が98パーセントまで高まり、さらに大学・短大への進学率が50パーセントを超えた現在であっても、公立中学から公立高校へ進学する既定の公立学校の「完成教育」とは違った「(大学への) 進学準備教育」という

側面を私立中高一貫校は持っている。

そのために、ほとんどの私立中高一貫校では、大学進学を前提とした教育課程（カリキュラム）、シラバスを組んで、高校卒業までの6年間で、大学に進学してからの学問・研究につながる学力の育成や、学習姿勢の下地づくりをめざしてきた。

系列の大学を持たない中高までの「進学校」であれば、生徒が希望する進路に向けて大学受験をクリアできる力を育てるために、毎年国公立私立大学の入試問題にも目を通し、中学入学から大学受験までを見通すことのできる教員が、6年間でどこまでの（どのような）学力を身につけさせるかという目標に向けて、遡って中1からのカリキュラムを組み立てる。

一方で系列の大学を持ち、大半の卒業生が推薦でその大学への進学ができる「大学付属校」であっても同様に、大学に進学してからの学問・研究に対応できる学力を育てるために、6年間の教育の組み立てを考える。

また最近では、一部の難関私立大学（慶應義塾大学や早稲田大学など）を除くほとんどの私立大学の付属校が、自校の系列大学にも何割かは推薦で進学でき、同時にそれ以外の大学（医学部をはじめ系列大学にない学部や、系列大学以外の難関国公立大学など）にも受験して合格できる力を育ててくれる「半付属校・半進学校」タイプの中高



桜丘中・高は全国でも早い時期から「ICT教育」を導入し実践してきた先進校。米アップル社の「ADE (Apple Distinguished Educators)」の認定も得ている。



一貫校になっている。そうした「半付属校・半進学校」では、先の「進学校」と「付属校」の両方の意味で、大学に合格、あるいは進学するために必要な（進学してから役に立つ）学力を生徒に身につけさせる教科教育の組み立てを工夫している。

なかには、古くは（創立時から戦前までは）家政・裁縫などの実学系の学校としてスタートした女子校でも、女性の社会進出の増加にともない、めざす教育のあり方を変化させ、やはり生徒の多くが卒業後は高等教育（大学・大学院）に進学する「進学準備教育」を行う学校へと姿を変えてきた。

現在の中学受験生（小学生）の保護者（父母）が中高生だった頃には、すでに多くの私立女子校が、そうした「進学校（あるいは大学付属校、半付属校）」に様変わりしていたが、まだ祖父母の世代には、創立期の家政・裁縫系の女子校だった頃の教育姿勢やイメージが記憶に残っている私立中高一貫校（豊島岡女子学園などはその典型）もあると思われるので、そうした女子校の変化も知っておくとよいだろう。

“相互理解・協調・共生の時代”に必要とされる力を育む

そしていま、学校教育の世界で使われてきた「進路指導」という言葉が表す意味も、時代の変化とともに大きく変わってきた。

現在では、単に卒業後の進路（大学や就職先）を選ぶための指針や相談、アドバイスだけではなく、生徒自身が将来の職業選択や生き方を考え、それを実現するための進路（進学先）選定や、その目標に向けての適切な準備（学習やアクション・プラン）が実現できるように、アドバイスや相談、職業見学や職業人による講演会など、生徒にとっての動機づけになる機会が中高の教育に求められ



聖学院の説明会で語られる「男子の成長」の特徴についてのお話にも多いと感じて、ファンになる保護者

るようになっている。

そうした生徒の進路選択や意識づけのサポートを、私立中高一貫校は公立学校に先駆けて実現してきた。この時期に、自校の中高6年間の教育をより充実させ、結果的に大学進学（合格）実績を大きく伸ばしてきたのは、多くの私立中高一貫校が力を入れてきた、広い意味でのキャリア教育の副産物だったといってもいいだろう。

この大学進学（合格）実績をはじめ、私学の教育の成果が目立って伸びてゆく過程で、特に女子校や女子の教育に大きな役割を果たしたのが「キャリア教育」だった。現在では女子の最難関に近い位置まで入試レベルを高めてきた鷗友学園女子中高などは、そうした女子のキャリア教育をいち早く導入して実践してきた先進校だ。

それは当然のことながら、単に卒業後の大学を選ぶ進路選択にとどまらず、将来の職業選択と、結婚・出産など女性にとっての人生の節目や、その後の職業復帰なども含めた「キャリアデザイン」を考えさせるものであり、さらに最近では、もっと長い目で自分自身の価値観（人生観）や生き方、ライフワーク・バランスをも考える「ライフデザイン」教育へと進化しつつある。

品川女子学院中高の「28プロジェクト」、中村中高の「30歳のわたし」を考えるキャリアデザイン、栄東中高が中2で「20年後の履歴書」を書かせる「キャリアAL（アクティブラーニング）」、

東京家政大学附属中高の「ヴァンサンカン (25歳)・プラン」なども、そういう私学の「ライフデザイン教育」の一環で、とくに女性が自身の幸せを感じられる職業選択や生き方を考えるキャリア・デザインのプログラムの典型といえるだろう。

私立中高一貫校の多くでは、そうした仕掛けが中高6年間の教育に組み込まれ、それが生徒の将来に向けた目標設定や目的意識を育てるうえでの大きな役割を果たしている。同時にそれが、日々の学習に向かうモチベーションを高めるきっかけにもなっている。

また、神奈川の栄光学園やサレジオ学院などのカトリック校では、「Men for Other's (他者のために生きる)」という共通のスローガンを掲げている。

たとえば志望する大学の合格に向けて努力をするのは、決して自分の(利益の)ためだけではなく、やがて社会に出て「他者に奉仕(貢献)するため」に必要なことだからだと考える。そうして将来、他者や社会のために貢献できる力を身につけるための前提として、目の前に大学受験というハードルがあるならば、それをクリアするために全力で努力をする使命があるというのが、多くのカトリック校に共通した考え方だ。

この先わが子が社会に出る2027年以降のグローバルな社会では、いま以上に多様な文化や価値観を持つ人々との“共生”“協働”の力が求められる。

そうした変化を前提に、ミッション・スクールではなくても、多くの私学は、その時代の世界で「より良い社会」をつくる担い手となり、自身も「より良く」生きていける力を育てることを教育の目標に掲げ、その素地や感覚、視点を中高6年間で育てることが、現在の私立中高一貫校の「キャリア教育」のめざすところなのだ。



中村中では来春入試から、スポーツ・英語芸術などの習い事に打ち込んできた小学生を受け入れ、新たな教育環境を創造するポテンシャル入試を新設した。

つまり、それぞれの私立中高一貫校は、生徒が思い描き希望する進路やキャリアを実現するための学力の育成やサポートに力を注いでいるということに他ならない。それは時代の変化や世の中のニーズにも柔軟に対応して、新たな時代に即した教育や学習指導を実践してくれるものと期待してよいはずだ。

男子と女子の成長リズムの違いを考えた 私立中高一貫校の進路&キャリア教育

また私立中高一貫校には、もともと男子校、女子校という「男女別学」教育を行ってきた学校が多いことはご存知の方も多いだろう。

しかし、1980年代後半から現在までの約30年の間に、多くの私立中高が男子校、女子校から「共学化」した。そのため現在では、男子校などは希少な存在になっている。

いずれにしても男子と女子とでは、小学生～中学2年生くらいまでは、成長のリズムや精神年齢の発達スピードが違う。一般的には中学入学の段階で1歳～1歳半くらい、女子の方が精神年齢が高いといわれている。それに応じて、多くの私立中高一貫校では、キャリア教育の導入学年や、学年ごとの仕掛けを違った形で工夫していることも知っておくとよい。

どちらかといえば、男子の場合には、まだ精神



年齢の若い中学生の時期には、将来のキャリアや職業選択、進路（大学の学部・学科）を早くから考えさせるよりも、中高6年の前半では自律的な学習習慣を身につけることや学力的な下地をしっかり鍛えることに力を注ぐケースが多い。やがて精神的に成長して社会的な視野や問題意識を持てるようになってから、じっくりと将来のキャリアや進路を考えさせていくスタイルだ。

一方の女子に対しては、男子よりも早い時期（中2くらい）から、時々将来の進路や、自分が希望するライフスタイルなどを考える機会を設け、それを学習の動機づけにもつなげていくようなキャリア教育が主流だ。現実的、社会的な感覚が育つのが男子よりも早い女子にとっては、早い段階から自身の将来をイメージすることが、目標に向けて着実に努力をしていく動機づけになる。

こうした男女の精神的な成長・発達のリズムに応じて、私学の男子校や女子校ではキャリア教育を導入していくことができる。

さらに、男子と女子をとともに受け入れている「男女併学（別学）校」である国学院大学久我山中のように、男子と女子では少し違った時期・内容のキャリア教育（それにつながる教育プログラム）を工夫している私学もある。

共学校では、そのように精神的な発達リズムの異なる男子と女子が一緒の環境の中で、中学生の



桐朋中の英語授業。音声聞いた後、即座に復唱するシャドーイングに挑戦。自主練習の後、生徒の音声を録音。回収した音声ファイルから先生が上手なものを選んで聞かせる。

時期には成長の早い女子がリードする形で、将来の職業や進路選択のための体験学習に取り組み、逆に高校の高学年になったときには、逆に女子よりも（一般的に）チャレンジ志向が強くとラストパートの馬力もある男子が、大学受験に向けて強気の受験校選択をすることで女子にも良い刺激を与えるなど、互いの特質を生かすような形でキャリア教育や進路選択が行われている。

そうした違いがあるなかで、どういう学校が、わが子の性格に合った、わが子にとっての良いキャリア教育、進学教育をしてくれるのか、多様な私学の教育姿勢、プログラムを保護者がよく調べて選択する必要がある。

こうした進学・キャリア教育のスタイルが、6年間の外国語（英語）教育や海外研修をはじめ、各教科の教育プログラムと不可分のものとなっているのは当然のことだろう。希望する進路や職業によっては、海外大学への進学という道も、現在の中高生にとっては重要な選択肢となっている。

私立中高一貫校では、その継続性と時間的なゆとりを生かして、こうした進路・キャリア教育にも時間を割くことが可能になる。

男子校・女子校・共学校いずれのタイプであっても、中学と高校の3年間ずつに分断された公立学校よりも、じっくりと「自分探し」ができる環境だといえるだろう。

スーパーグローバル大学に選ばれた大学
トップ型（4億2千万円補助）
北海道大、東北大、筑波大、東京大、東京医科歯科大、東京工業大、名古屋大、京都大、大阪大、広島大、九州大、慶応義塾大、早稲田大
グローバル化けん引型（1億7千万円補助）
千葉大、東京外国語大、東京芸術大、長岡技術科学大、金沢大、豊橋技術科学大、京都工芸繊維大、奈良先端科学技術大学院大、岡山大、熊本大、国際教養大、会津大、国際基督教大、芝浦工業大、上智大、東洋大、法政大、明治大、立教大、創価大、国際大、立命館大、関西学院大、立命館アジア太平洋大

「読む・書く」に加え「話す・聞く」の4技能が問われる この先の大学入試とグローバル社会 ～現在の小学生が生きる社会で求められる英語の力とは？～

今後の「大学入試改革」で求められる英語力の、
 基準として紹介されている「CEFR」とは？

いま日本の教育の最大の課題ともいわれるグローバル化のために、新たな大学入試の制度では、英語の4技能（「読む」「書く」「話す」「聞く」）を総合的に評価するために、英検やGTEC-CBT、IELTS、TEAP、TOEFL-iBT、TOEICなど、民間の資格・検定試験の活用がすでに検討されている。

そして文部科学省のWebサイトでは、すでにそこで求める英語の力の目安として、ヨーロッパで様々な言語をひとつの基準で参照できるようにした、英語レベルの共通基準「CEFR」が紹介され、「2020年大学入試改革」で導入される候補としてあげられている民間の英語検定試験の対照表（得点の目安）までが掲載されている。

このうち「A1～B2」までの英語力が、「大学入試センター試験」に代わって導入される「高等学校基礎学力テスト（仮称）」と「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」で求められる力だとすると、国公立大学の2次試験（独自試験）や、難関私立大学の独自入試では、その先の「C1」レベルの英語力が要求される時代になってくるという。

そして、そうした変化にいち早く柔軟に対応し、2020年からの大学入試改革で求められる、4技能のバランスのとれた高い英語力を育ててくれるのは私立中高一貫校だということだ。さらに将来の社会で、多様な文化や価値観を持つ世界の人々と「共生・協働・協調できる力＝コミュニケーション力」を育ててくれる学校として、日本の教育をリードしていくのは、やはりこれまでも英語教育を重視してきた私学に他ならないだろう。



八雲学園では、英語を重視する私学のなかでも破格の英語教育が実践されている。

多様な人々と協働できる力を育てるために 私学がめざすダイバーシティ環境とは？

ダイバーシティ (diversity)とは「多様性」の意味である。学校教育の世界では、多様な国籍の子どもたちが通うインターナショナルスクールが「ダイバーシティな学校」といわれることがある。確かに、人種や国籍が多様な環境は、ダイバーシティの要素の一つであることには違いない。

しかし、ダイバーシティの「多様性」の本質はそれだけではなく、「一人ひとりの個性に目を向けること」によって、容貌、価値観、宗教、志向、行動スタイル、能力…、これらの個性を理解し合って、それに合わせた生き方を可能にすることこそダイバーシティ型社会のあり方で、それぞれが互いの強みを知り、どうすれば社会に貢献できるのかを理解してお互いにサポートし合えば、価値あることを成し遂げられる、という考え方がある。

そしてこの数年の間に、私立中高一貫校のなかには、この「ダイバーシティ」的な教育環境をつくるために、帰国生の受け入れや、インターナショナルスクール（小学校）からの受験生、英語既習者、芸術・音楽・スポーツなどに打ち込んできた多様な文化的背景や学習スタイルを経てきた小学生の受け入れを、より積極的に進めようとする学校が増え始めている。

国内では最難関である東京大学でさえ、多様なバックボーンや能力を持つ受験生を来春から、推薦入試で約100名を受け入れようとしている現在、中高の教育現場でも、こうした「ダイバーシティ化」がひとつの課題になってくることだろう。

各試験団体のデータによるCEFRとの対照表

CEFR	英検	GTEC CBT	TOEFL iBT	IELTS	TEAP	ケンブリッジ英検	TOEIC & TOEIC SW
C2				8.5-9.0		Proficiency (CPE: 特上級)	
C1	1級	1400	110-120	7.0-8.0	396	Advanced (CAE: 上級)	1305-1390
B2	準1級	1250-1399	87-109	5.5-6.5	334	First (FCE: 上中級)	1095-1300
B1	2級	1000-1249	57-86	4.0-5.0	226	Preliminary (PET: 中級)	790-1090
A2	準2級	700-999		3.0	186	Key (KET: 上初級)	385-785
A1	3級-5級	-699		2.0			200-380

英検: 日本英語検定協会 <http://www.eiken.or.jp/for-teachers/data/cefr/>
 TOEIC: ETS http://www.ets.org/toeic/resources/pdf/1212_12toeic_study_intern_report.pdf
 ケンブリッジ英検: ケンブリッジ大学英語検定所 <http://www.cambridgeenglish.org/news/and-qualification/cefr-toeic/>
 GTEC: ベネッセコーポレーションによる資料より
 TOEIC: NBC <http://www.nbc.or.jp/toeic/about/cefr-toeic.html>
©2016 英検、英検®の登録商標は入試における登録商標(商)として使用され、英検®の登録商標は登録商標として使用されています。